

教職員自主的研究推進事業 実績報告書

研究グループ名【西宮で平和教育を考える会】

代表者の所属・職・氏名	西宮市立 樋ノ口小学校	連絡先	住所	西宮市樋ノ口町 2-3-32
			T E L	0798-65-6558
	F A X		0798-65-9692	
	e-mail アドレス		hinokuel@nishi.or.jp	
	主幹教諭 高見 祥一			

活動実績

研究テーマ

平和を構築する市民を育てるための平和教育のあり方をさぐる。

研究の概要

西宮で平和教育を考える会では、これまでに平和パネル作成や平和マップ作成を通して、地元西宮において戦争を伝える方法について研究してきた。しかし、平和教育を考える時に戦争を教えるだけでは不十分なことは認識していた。教育基本法の<第1条>（教育の目的）に「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」と記されているように、平和な社会をつくる国民を育てることが平和教育の目的であるといえるだろう。

そこで、今年度の活動として、ひとつの流れとして、憲法や国旗国歌といった、しばしば意見対立が見られるが、この社会のアイデンティティに関わる大切なことがらをどう教えるかについて考えた。一方で地域から平和を考えることもしてきた。パネルのリニューアル作業なども行いながら、外部の機関とつながって活動した。地域の労働団体のフィールドワークと郷土資料館の講座に講師として参加し、市民や行政職員、図書館司書の方々とつながることができた。

<研究活動の経過>

5月3日 憲法フィールドワーク

憲法記念日に朝日新聞襲撃事件資料館を見学し、言論の自由と人命尊重について考えた。

6月15日 憲法学習会「憲法について考えてみよう」（於 教育会館）

最近話題になることが多い、日本国憲法。改正しようとする考え、護ろうとする考えの両方に触れ、平和をめざす憲法のあり方について考えた。（参加者約30名）

6月25日 フィールドワーク 講師参加

アンネのバラ教会から、「火垂るの墓」の舞台、そして大社小学校メモリアルホールをめぐるフィールドワークに、要請されて、3名で講師参加。平和マップとその解説編を用いて、ニテコ池周辺の「火垂るの墓」ゆかりのポイントを案内し、大社小では西宮の空襲と大社国民学校の被災についての講話を行った。（参加者14名）

8月18日 親と子の郷土史講座「戦闘機を作った工場」講師および補助として4名参加

川西航空機工場と鳴尾村の歴史についての講座を開いた。ゲームやクイズも取り入れて、小学生とその親に身近な土地と戦争との関わりを考えてもらった。（於 西宮市郷土資料館 参加者32名）

9月14日 国旗について考えてみよう（於 教育会館）

日本国旗とその歴史的経緯、戦前の教育での教え方などを学び、さまざまな立場の人たちの国旗に対する多様な思いを知り、オリンピックなどにおける最近の国旗を巡るトピックスについてもふれ、国旗の指導のあり方について考えた。（参加者約30名）

10月19日 平和パネル作成（於 教育会館）

以前に作成した西宮平和パネルは、写真が古くなっているものや現状が変わっているものがある。新しい写真と現状に合わせて改訂した解説文とを整理し、パネル化する作業を行った。追加したいパネルについては今後も検討を重ねていくこととした。

11月16日 国歌について考えてみよう

世界各国の国歌の歌詞と演奏に触れ、その多様性や共通点について考える。そして資料から各国の人びとの国歌に対する思いの多様性や共通点についても考える。その上で、日本国歌「君が代」の歴史を学び、国歌の指導のあり方について考えた。（参加者約30名）

1月4日・5日 長崎フィールドワーク

被爆地長崎を訪れ、資料館やメモリアルを巡った。城山小学校では被爆当時の在校生だったガイドの方に案内していただき、体験に基づくお話をうかがった。翌日は軍需工場が存在し、それを標的とした空襲があった大村市を巡った。両市とも、戦争を伝える努力を目に見える形で行っていて、西宮で戦争を伝えることを考えていく上で、参考になった。

1月14日 西宮ゆかりの小説を読もう

西宮市立鳴尾図書館主催の市民対象の読書会に声をかけていただいて参加した。夏の郷土史講座で使った地域資料を使用したいとの意向であった。城山三郎作『零からの栄光』の読書会に参加するとともに、当日回覧された資料の説明を行った。

<成果と課題>

憲法、国旗、国歌については指導すべき内容であるにもかかわらず、しばしば意見対立を導くために、あまり話題にせず敬遠されてきたようである。しかしいずれも、科学的な歴史認識のための資料、多様な意見のバランス良い紹介、学習者が受け身一辺倒にならず主体的に学ぶためのグループワークやワークショップ形式の導入などの工夫をすれば、平和教育として実践できるものだと考えられた。これらの問題をしっかり考えられる子どもを育てることが、グローバル化された世界で平和を構築する人間をつくることにつながると考える。

地域から平和を考えることには、引き続き取り組んだ。学校教育以外の場でフィールドワークや講座を持つと、子どもも大人も、自分の住むまちにそんなものがあつた（そんなことがあつた）のかと驚きをもち、ついで、もっと知りたいという関心を持つようである。また、郷土資料館や図書館などで文化行政に携わっている方と地域からの平和教育の大切さを共有することができたと思う。さらに、戦争遺跡や平和モニュメントの保存や活用についても、もっと推進する必要があるということで意見は一致した。これは、長崎・大村のフィールドワークで実感したことと同様である。まちの中の随所に、原爆や戦争にゆかりのものが残され、解説板があつたりガイドが配置されたりしているあの地の現状は、西宮における平和教育を考える上で参考になる。子どもも大人も、身近にそういうことがあると気づけば、関心を持つのである。

今後、学校内外で平和や戦争への関心を喚起し、平和をつくろうとする意欲を高めるための地域教材の開発をさらに深め、また、広げる必要がある。その一助となるであろう、平和パネルと

平和マップの研究とリニューアル作業は続けていきたい。また、授業化を進めるための実践研究も続けていかなければならない。今年度の取り組みの中から、西宮に関連する文学作品を通して平和を考える、という方向の有効性が見えてきた。そのひとつの取り組みとして「火垂るの墓」を、アニメだけでなく原作の小説を通してとらえる作業が考えられる。新年度には野坂昭如の書いた小説を読み解いてゆく読書会を始めていきたい。